

児童・生徒用妬み測定尺度の作成

筑波大学大学院(博)心理学研究科 澤田 匡人

筑波大学心理学系 新井邦二郎

Construction of an enviousness scale for elementary and junior high school pupils

Masato Sawada and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of the present study was to construct an enviousness scale for elementary and junior high school pupils and to examine its reliability and validity. Twenty-eight items in all were prepared for a pilot scale, which was administered to 805 elementary and junior high school pupils, together with an inventory for assessing hostility, irritability, and inferiority. Based on the results of factor analysis, a scale was constructed consisting of 18 items with two factors or subscales: enmity towards others and self-belittling. Reliability was confirmed by the coefficient alpha and the test-retest method. Correlation analysis revealed that all the validity of all subscales was high.

Key words: envy, enviousness scale, pupils, validity, reliability.

現代社会においては万人の平等が謳われているものの、すべての人間が同じ状況のもとで生活し、同じだけの所有に与るということは現実的ではなく、実際は、財産や能力、容姿や境遇にいたるまで、さまざまな領域における差異が存在している。そして、他者が自分よりも多くの所有に与っているのを目の当たりにしたとき、人はその他者が所有しているものを自分のものにしたいと思うと同時に、不快な感情に苛まれることがある。こうした感情は、一般に妬み (envy) と呼ばれる。

妬みとは、Salovey & Rodin (1985) によれば、“自分の個人的資質、所有物、業績が、自分と関係ある誰かのそれに及ばない場合に生じる感情、思考、行動”と定義されている。そして、次の3つの条件によって妬みが喚起されると考えられている (Salovey, 1991; Salovey & Rodin, 1984; Silver & Sabini, 1978)。第一の条件は、他者と比べたときに、自分についてネガティブな情報を受け取ることである。ここでは社会的比較が行われ、自分の方が劣っていると判断されるため、主として自尊心の低下がもたらされる。第二の条件は、その情報に自分

が深く関わっていることである。換言すれば、他者の資質や所有物といった比較される対象の属する領域が、自己定義の中心に据えられている場合である。第三の条件は、比較の対象となった他者が、自分と類似している、あるいは、近い関係にあるとの判断である。

こうした妬みの喚起条件とは別に、Smith, Parrot, Ozer & Moniz (1994) は、妬み状況において生じる敵意が、主観的不公正感によく予測されることを明らかにしている。すなわち、他者の有利さが公正でなく不当であるとの判断が、妬み状況下における敵意の喚起に寄与していると考えられる。また Horney (1937) は、劣等感が増大すると他者への妬みが生じると論じている。彼女によると、自分より優れた他者に対する敵意を抑圧しようとして、自己の格下げ、すなわち自己蔑視がなされる。そして、この自己蔑視と、現実の自分の短所に関する認識が合わさって劣等感が強迫的に強まり、その結果、妬みが生じるのだという。このように、妬みには敵意と劣等感の存在は不可欠であると考えられるため、この2つの感情が妬みそのものを構成してい

るとも捉えられる。したがって、同じ妬みといっても、それを構成している感情の質的な違いによって、異なる構造を有している可能性がある。

妬みの構造に関する議論において、妬みを2つのタイプに分類する研究者は多い。たとえば、Neu (1980) は、妬みを明確に理解する上で、*admiring envy* と *malicious envy* という区別を提唱している。*malicious envy* が、他者が自分よりも低くなることを望むものであるのに対し、*admiring envy* は、自分自身をその優れた他者のようになるまで高めようと望むことである。また、高橋 (1987) は、羨望 (妬み) に敵意という成分が含まれているか否かということに基づいた分類を行い、敵意が含まれている羨望を複雑羨望、敵意が含まれていない羨望を単純羨望と呼んだ。したがって、社会的比較によって喚起される妬みは一樣ではなく、既述した分類に共通してみられているように、悪意や敵意といったネガティブな特徴が顕著な感情反応と、必ずしも直接的に相手に対するネガティブな反応とはならず、劣等感や自己蔑視に留まるような妬みの2つが混在しているといえる。

ところで、近年は、子どものいじめや抑うつといった不適応の問題が注目されてきている。特に、子ども同士のいじめの背景には、いじている子がいじめられる子に対して抱いている妬みが存在しているのではないかと指摘がある (土居, 1998; 土居・渡部, 1995)。また、子どもが自己評価を低下させると抑うつに陥りやすいと考えられており (村田, 1993)、学業成績などの順位が付きまとう領域への関心が強まる子どもでは、ネガティブな社会的比較に基づく感情であるところの妬みが、抑うつへ至るまでに重要な役割を担っている可能性がある。しかし、特に子どもの妬みと、いじめのような問題行動や抑うつのような不適応との関係を詳細に検討した研究は皆無に等しい。その一因として、妬みという概念を測定する方法が確立されていないことが挙げられる。

妬みを測定するために、Bers & Rodin (1984) は、架空の物語を子どもに呈示し、その物語の主人公がどう思ったかということを評定させている。この手法で妬み感情項目として用いられたのは、“願望” “権利感覚” “悲しみ” “漠然とした怒り” “他者に対する怒り” であった。同様に、坪田 (1991, 1993) は、大学生に対していくつかの状況文を見せ、それらの状況下で登場人物が“ねたましさ” “うらやましさ” といった感情をどの程度感じているかを回答させている。このように妬みが喚起されるような条件を備えた状況文をあらかじめ用意

して、妬みを評定させる手法を用いた研究は、この他にも数多く見受けられる (たとえば、Parrott & Smith, 1993; Salovey & Rodin, 1986)。こうした一連の研究で測定されているのは、架空の物語で妬みの認知的な側面ともいべき妬みの喚起条件を呈示することで、その後には喚起される感情を推測させており、状態としての妬みに近いものを測定しているといえよう。しかし、同じ状況であっても妬みを抱きやすい人と必ずしもそうでない人がいるように、個人差としての妬みの存在を無視することはできない。

従来、質問紙を用いた妬みの個人差の測定は、他の特性の下位概念として扱われるに留まっていた。Hupka, Buunk, Falus, Ortega, Swain & Tarabrina (1985) は、恋愛に関する嫉妬の個人差を測るために69項目からなる尺度を開発し、その下位尺度の一つに妬みに該当する概念を測定する尺度が含まれている。また、マテリアリズム尺度 (Belk, 1985) の3つの下位尺度の中にも“妬み”と名付けられたものがある。しかし、いずれの尺度も妬みそのものの測定を意図して作成されたものではなく、また項目数も少ないので、包括的な個人差としての妬みを捉えているとはいえない。

こうした状況の中で、Gold (1996) は、人格特性としての妬みに関する検討がほとんどなされていない点を指摘し、20項目からなる自己報告型のヨーク妬み尺度 (York Enviousness Scale; YES) を作成した。しかし、本邦では個人差としての妬みを扱った研究は見あたらず、子どもを対象とした適当な妬み尺度の開発も行われていない。そこで、本研究では、YES (Gold, 1996) などを参考に、児童・生徒に適した自己報告型の妬み尺度を作成することを目的とする。なお、本研究では、妬みはあくまで感情が主であるが、その喚起要因と喚起された後に生じる行動を加味し、感情的側面だけではなく社会的比較に対応した認知的側面、および行動の意図に関わる側面にも留意して項目を作成した。

尺度の妥当性については、次のように検討する。まず、妬みに関する従来の尺度は全て単因子構造であったが、既述したように、妬みには少なくとも2つの側面、すなわち、相手に対して敵意を抱くことに類する妬みと、劣等感に苛まれる形の妬みがあると考えられる。そこで、本研究では因子的な妥当性を確認する。構成概念妥当性は、Gold (1996) にならない、敵意、いらだち (怒り)、劣等感との相関を検討する。理論的に妬みはネガティブな感情反応であり、他者に対する攻撃性や自己に対する蔑視を内包しているものと考えられるため、妬みを強く抱く

者は、他者に対していらだちや敵意を感じやすく、劣等感も強いと予測される。

方 法

被調査者 栃木県下の公立A小学校とB小学校の4, 5, 6年生の児童544名(男子264名, 女子280名), および公立C中学校の1, 2年生の生徒261名(男子133名, 女子128名)の合計805名であった。

質問紙 質問紙は、教示, 例, および4つの尺度から構成された。

(1) 児童・生徒用妬み尺度原案28項目: Gold (1996) のYES, Hupka et al (1985) の嫉妬に関する尺度の下位尺度, およびBelk (1985) のマテリアリズム尺度の下位尺度を参考にして, 28項目を用意した。まず, 収集された全ての尺度項目を訳出し, 子どもにもわかるような表現に改めた。その中で, 妬みを感じている状態と, 妬みを感じた後の意図に言及した項目を残し, さらに適当な項目を追加し28項目とした。項目は4段階評定(“そう思う” “少しそう思う” “あまりそう思わない” “そう思わない”)での回答が求められ, 4-1点が与えられた。

(2) 敵意尺度: 敵意的攻撃インベントリー (秦, 1990) から, 敵意を測定する概念10項目を用いた。

(3) いらだち尺度: 敵意的尺度と同様に, 敵意的攻撃インベントリーから, いらだちを測定する尺度8項目を用いた。なお, 敵意尺度, いらだち尺度のいずれの項目については, 5段階評定(“そうだ” “少しそうだ” “どちらともいえない” “少しちがう” “ちがう”) で回答され, 5-1点が与えられた。

(4) 劣等感情尺度: MG性格検査(本明・久米・織田・応用教育研究所, 1976) から, 劣等感情を測定する10項目を抜粋した。項目は“はい” “いいえ” の2件法で, 当該概念に対応する反応には1点, 反応しない場合には0点が与えられ, それぞれ得点化された。

手続き 質問紙は1997年9月初旬に, クラス単位の集団で実施された。また, 再検査法による信頼性の検討のために, 小学4, 5, 6年, および中学2年の各1クラスの児童・生徒合わせて125名(男子63名, 女子62名)に対して, 3週間後に妬みに関する項目のみが再び配布され, 回答が求められた。

結 果

因子構造 妬み尺度原案28項目の中で, 得点に極端な偏りが認められる項目を除くため, 項目平均が1.5-3.5までの22項目が抽出された。次に, 残った

22項目を因子分析にかけた。共通性の初期値をSMCとした反復主因子法を実施し, 後続因子との固有値の差に基づいて2因子解を適当と判断した。このときのSMCの合計値は7.93, 項目1個あたりの平均は.36, 累積寄与率は36.0%, 反復推定後の説明分散は7.91であった。そして, 得られた因子に対してプロマックス回転を施した後の因子パターン行列と, 22項目の平均値と標準偏差をTable 1に示した。

第1因子は, “まわりの人が私より楽しそうであればあるほど, ますます嫌な気持ちになっていきます” “まわりの人が楽しんでいるのをみるのは嫌いです” “私に勝つような人は憎らしいです” などの項目に高い負荷量が認められた。これらの項目は, 自分よりも有利な立場にある他者に対して否定的な感情を抱いていることを示している。また, “だれかが楽しくしていると, 嫌なことを言って, やめさせたくくなります” “ときどき, 私より優れたとこのある友だちを無視したくなります” などのように, 他者に対して敵意を抱き, その具体的な表出をも意図した内容の項目も含まれている。そこで, 第1因子は, “他者嫉視¹⁾” 因子と命名した。

第2因子に高く負荷している項目には, “まわりの人たちの自分が自分よりも幸せそうに見えることがあります” “ときどき, まわりから取り残されると感じる場合があります” などがみられた。これらの項目が意味するところは, 他者と比較して自己の劣等性に焦点化され, 内省的で消極的な態度である。また, “まわりの人と自分とを, よく比べます” という項目は, 社会的比較を行う頻度に該当した項目である。したがって, 第2因子は, 社会的比較を頻繁に行うことにより自己を格下げして認識し, その結果として自分が劣っているということに苛まれる反応を示すと捉えられるため, “自己蔑視” 因子と命名した。

Table 1に示された項目のうちで, 各因子への負荷量が.40以上の項目で下位尺度を作り, 以後の分析に用いた。他者嫉視尺度は12項目, 自己蔑視尺度は6項目である。この最終的に残った18項目のみで再度因子分析を行い2因子抽出したところ, 各因子に対する負荷量は初回よりも高くなった。このときのSMCの合計値は6.41, 項目1個あたりの平均は.36, 累積寄与率は37.9%, 反復推定後の説明分散は6.82

1) 広辞苑によれば, “嫉視” とは “憎しみの目で見ること” とある。本研究では第1因子を解釈するにあたり, 相手に対して憎しみや敵意を抱く点を重視して “他者嫉視” という用語を用いた。

Table 1 妬み尺度22項目の平均と標準偏差, およびバリマックス回転後の因子パターン行列

項目	M	SD	F 1	F 2	h ²
2. まわりの人が私より楽しそうであればあるほど, ますますいやな気持ちになっていきます	1.63	.82	.73	.08	.61
7. まわりの人がたのしんでいるのを見るのはきらいです	1.54	.75	.71	-.02	.48
9. 私に勝つような人はにこしいです	1.57	.82	.68	.00	.46
12. まわりの人がうまくいっていると, 怒りを感じます	1.58	.80	.67	.11	.55
13. だれかが楽しくしていると, いやなことを言ってやめさせたくになります	1.56	.75	.65	.01	.44
18. 知り合いが得をするくらいなら, ぜんぜん知らない人が得をする方がましです	1.78	.94	.57	.00	.32
20. ときどき, 私より優れたところのある友だちを無視したくなることがあります	1.78	.88	.55	.11	.39
15. 友だちがうまくいくと, 心を傷つけられたような気持ちになります	1.74	.86	.46	.22	.39
10. うまくいっている人を見ると, つらくなります	1.80	.88	.44	.31	.46
3. 自分の持っていないもので友だちが楽しんでいるのを見ると, イライラします	1.81	.86	.40	.31	.41
23. 自分がしたくてもできないようなことをだれかがしているのを見ると, 怒りを感じます	1.92	.91	.35	.30	.35
26. ときどき, だれかの楽しみを邪魔したいと思うことがあります	1.85	.92	.35	.20	.25
6. 自分が負けたときでも, 勝った人を素直にほめることができます (R)	1.96	.83	-.43	.03	.17
21. うまくいっている友達をみるのは, 楽しいことです (R)	2.12	.90	-.61	.23	.25
1. まわりの人たちが, 自分より幸せそうに見えることがあります	2.58	1.00	-.12	.66	.35
4. ときどき, まわりから取り残されていると感じることがあります	2.61	1.02	-.11	.66	.35
8. まわりの人は, いつも自分より良いものをもっているように見えます	2.02	.94	.02	.54	.30
28. いつも, 自分がぎせいになっているような気がします	1.96	.94	.17	.50	.39
14. 私が欲しいものを持っている人のことが, とても気に入りませす	2.29	1.01	.01	.50	.25
19. まわりの人と自分とを, よく比べます	2.48	1.02	.02	.46	.22
25. 私がとてもほしがっていたものをだれかが持っているのを見ると, ショックを受けます	1.91	1.00	.14	.35	.20
24. 友だちがうまくいくことを考えると, 心が苦しくなってしまいます	1.62	.79	.29	.33	.31

Note. 得点範囲は1-4点.

(R)は逆転項目.

であった. なお, 2因子間の相関は, 22項目を用いた分析では.62, 18項目のものでは.59であった.

信頼性 内的一貫性については, クローンバックの α 係数で検討された. 他者疾視尺度12項目のI-T相関は.39-.73の範囲内にあり, α 係数は.88であった. 自己蔑視尺度6項目のI-T相関は.35-.52の範囲内にあり, α 係数は.72であった. 自己蔑視尺度の α 係数がやや低いものの, 内的一貫性についてはある程度満足のいく値が得られた. 3週間後の再検査法による信頼性係数は, 他者疾視尺度が.79, 自己蔑視尺度が.80であり, 高い安定性が示された. 以上のように, 内的一貫性と安定性いずれも高く, 本尺度の信頼性が十分に認められた.

妥当性 構成概念妥当性を検討するために合わせて実施した各尺度との相関を Table 2 に示した. 他者疾視尺度と自己蔑視尺度いずれの尺度も, 敵意, いらだち, 劣等感情と正の相関が認められた. 3つの尺度との相関係数は, 他者疾視尺度とよりも自己蔑視尺度の方が, 幾分高かった. 周囲と比べて自己評価を低める傾向にある者は, 敵意やいらだちといった相手に対する敵対感情を抱きやすいといえ

る.

学年差・性差 Table 3 には, 妬み尺度の学年別・男女別および全体の平均と標準偏差が示されている. 下位尺度ごとに5(学年:小学4年生, 小学5年生, 小学6年生, 中学1年生, 中学2年生) \times 2(性:男子, 女子)の2要因分散分析を行った. その結果, 他者疾視尺度では学年の主効果 ($F(4, 795)=4.48, p<.01$) と性の主効果 ($F(1, 795)=3.87, p<.05$) が認められ, 女子よりも男子の方が有意に高かった. 学年差については, FisherのLSD法を用いた多重比較を行い, 小学4年生の方が小学5, 6年生と中学1年生よりも得点が高く, 中学2年生の方が中学1年生よりも高い傾向が見られた ($MSe=43.09, p<.05$). なお, Fig. 1 に, 学年の違いによる他者疾視尺度得点の平均の推移が示されている.

自己蔑視尺度では, 学年の主効果のみが有意であった ($F(4, 795)=3.25, p<.05$). 多重比較の結果, 中学2年生と, 小学4, 5, 6年生および中学1年生との間に有意な差が認められた ($MSe=14.55, p<.05$). Fig. 2 には, 学年別・男女別の自己蔑視尺度の平均点が示されている. このグラフによると,

Table 2 妬み下位尺度と敵意、いらだち、劣等感情との相関係数

	敵意	いらだち	劣等感情
他者疾視	.52**	.44**	.41**
自己蔑視	.61**	.49**	.49**

Note. ** $p < .01$

小学4年生から小学5年生にかけてやや減少しているものの（有意な差ではない）、全体的には加齢に伴う増加傾向が見られ、中学2年生で男女ともに最も得点が高かった。

考 察

児童・生徒用妬み尺度は、因子分析の結果から全18項目、2下位尺度（他者疾視、自己蔑視）で構成された。12項目からなる他者疾視尺度は、自分より有利な他者に対する不快感情を自覚し、時には具体的な行動として表出する傾向を示しており、ネガティブさの度合いが強い妬みである malicious envy (Neu, 1980) や、複雑羨望（高橋, 1987）と対応し

た概念を測定する尺度といえる。一方、6項目から構成される自己蔑視尺度は、主として妬みにおける認知的側面、すなわち自己評価の低下を示す認知とそれに伴う感情反応に関する項目からなり、他者と比べて有利でない自分に焦点化する自己蔑視傾向（Horney, 1937）や、敵意という成分が含まれてない単純羨望（高橋, 1987）と類似した概念を。したがって、この自己蔑視尺度は、測定する尺度である。なお、他者疾視尺度と自己蔑視尺度の相関係数は.54であり、互いに密接に関連し合う形で妬みという一つの概念を構成しているものと考えられる。

尺度の信頼性については、内の一貫性を推定するクロンバックの α 係数と3週間後の実施された再検査法による安定性係数の2つの方法で検討され、いずれの下位尺度においても十分な信頼性が確認された。

妥当性は、理論的に妬みとの関連が考えられる敵意、いらだち、劣等感情との相関で検証された、両下位尺度ともに、上記の各尺度とは中程度の正の相関が示され、本尺度の構成概念妥当性が確認された。また、各尺度との相関係数は、他者疾視に比して自己蔑視の方が一貫して高い傾向にあることが示

Table 3 学年別・男女別の妬み下位尺度の平均と標準偏差

	小学4年		小学5年		小学6年		中学1年		中学2年		全体	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
	N = (91) (96)		(92) (100)		(81) (84)		(79) (78)		(54) (50)		(397) (408)	
他者疾視	22.88	21.77	20.92	20.53	20.47	20.07	19.65	19.28	22.67	20.22	21.24	20.44
	[8.14]	[7.81]	[6.59]	[5.68]	[5.31]	[5.86]	[5.41]	[6.14]	[7.35]	[6.85]	[6.71]	[6.53]
自己蔑視	13.77	14.19	13.55	13.35	13.32	14.00	13.68	14.10	15.40	14.76	13.84	14.01
	[3.65]	[4.10]	[4.32]	[3.42]	[4.00]	[3.25]	[3.40]	[3.90]	[3.96]	[4.04]	[3.93]	[3.74]

Note. [] 内は標準偏差を示す。

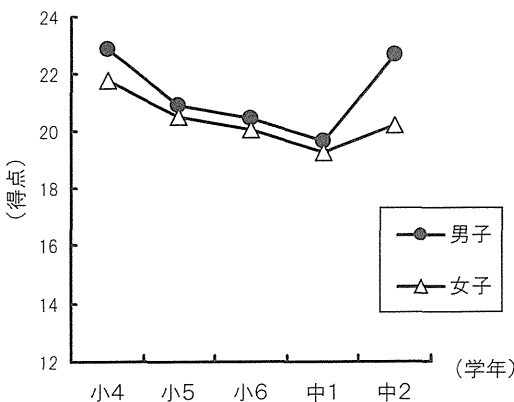


Fig. 1 学年別・男女別の他者疾視尺度得点の変化

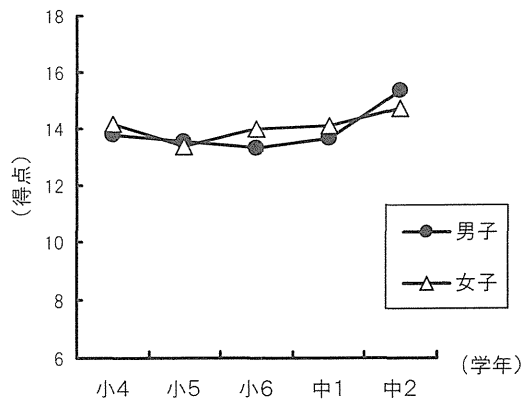


Fig. 2 学年別・男女別の自己蔑視尺度得点の変化

された。劣等感情との相関が高かったことは、自己蔑視尺度とその指示内容に共通点が多いことから妥当な結果であるといえる。同様に、敵意尺度との相関が高かった点に関しても、敵意尺度には“私は、いつも損をしていると思う”“私は、友達や先生から嫌われていると思う”といった自己蔑視尺度の項目と内容的に重なる項目が含まれていたために、相関が高くなったと考えられる。

まず、他者疾視尺度に関しては、女子よりも男子の方が得点が高かった。こうした性差がもたらされた理由として、この尺度は妬みの敵意的な側面を測定した尺度であるため、男子の方が女子よりも攻撃性が高いこと(秦, 1990)が直接反映された結果だといえる。また、もう一つの理由としては、共感の影響も考えられる。共感とは、首藤(1994)によれば、“他者の感情を認知する際にその他者と共有される感情反応”と定義される。妬みが他者の幸福を不快とする感情反応であるのに対し、共感他者の感情状態が共有される反応であるため、相手が幸福で喜んでいれば快感情が喚起される。対人態度の感情構造を検討した中里・田中(1973)は、同一因子内で、“かわいそうだ”という項目が正の負荷量を示していたのに対し、“うらやましい”が負の負荷量を示す“妬み-憐憫”因子の存在を確認している。したがって、妬みは、相手の感情とは逆の感情が喚起される反応の一種であり、相手と同じ感情を抱くことを指示内容とする共感とは、相反する概念だと考えられる。そして、子どもの共感性については、桜井(1986)が、小学校5,6年では女子の方が男子よりも共感性が高いことを報告している。以上の点から、共感性の高さが妬みの喚起に抑制的に働き、女子に比して共感性の低い男子の方が、ネガティブさの程度の強い妬みを感じやすいのではないかと推察できる。さらに、他者疾視尺度の項目が、概してネガティブな内容であったことが、性差に影響を及ぼした可能性もある。他者に対してネガティブな感情を抱いたことを表明することは、社会的に是認されやすいものではない。そのため、社会的に望ましいとされる反応に敏感な子どもであれば、ネガティブな感情を感じる傾向は極力抑えるに違いない。児童においては、女子の方が男子より社会的望ましさに反応しやすいことが明らかにされており(桜井, 1984)、こうした社会的望ましさをの性差が、男子の他者疾視尺度得点を低める結果に繋がったものと考えられる。

また、男女ともに4年生から中学1年までは一貫して減少傾向にあった。こうした妬み感情の加齢による減少について、Bers & Rodin(1984)は、その

一因として社会的望ましさを挙げている。したがって、本研究でみられた学年差についても、性差に関するものと同様の原因に求めることができる。すなわち、小学生では学年が上がるにつれて社会的望ましさに反応しやすくなっていくことが(桜井, 1984)、妬みの表出や呈示の抑制に作用していると考えられる。そこで、性差への影響も併に検討するためにも、共感性や社会的望ましさといった変数と妬みの関係を明らかにすることが望まれる。また、中学1年までは減少していたにもかかわらず、中学2年生になると急激に増加していた。この点については、この時期に差し掛かると、自分が抱いている妬みを抑制していく方向とは別に、それを行動への意図や敵意として示す方向に変化したことを反映した結果ではないかと推察された。なぜなら、12歳から14歳にかけての主観的な自己統制感の急激な増加(Steinberg & Silverberg, 1986)に伴い、妬みというネガティブな反応の表出を自分でコントロールすることが可能になると考えられたからである。しかし、中学2年生のみが他の学年と比して少ないクラスの生徒を対象とされたため、クラスの特徴といった変数が混入した可能性も否定できず、また、中学3年以降の妬みの発達の変化も明らかにされていないため、中学2年でみられた変化の解釈については慎重を要する。

一方、自己蔑視尺度では、性差は認められなかったが、他者疾視尺度と逆に、加齢に伴って得点が増加していく学年差が認められた。自己蔑視尺度は妬みの認知的側面を反映した尺度であるため、こうした増加傾向は、相対的な自己評価のための社会的比較が頻繁になっていくことを示しているといえよう。Bers & Rodin(1984)も、発達していくにつれて妬み状況における自発的比較の増加を報告しており、本研究の結果と一致している。また、自己蔑視尺度は、自己蔑視傾向(Horney, 1937)や、それに伴う劣等感と対応した概念でもある。自己蔑視と劣等感が密接不可分であるなら、本研究で確認された自己蔑視尺度得点の加齢による増加は、小学4年から小学6年までの間で劣等感を感じるものが増えていく傾向にあるとの報告(堂野・山中, 1988)に対応しており、発達段階が進むにつれて劣等感に打ちひしがれる機会が多くなっていく子どもの姿が反映されたものと考えられる。

今後取り組むべき課題としては、妬み尺度の妥当性の拡充が挙げられる。本研究では、敵意、いらいら、劣等感情との相関が検討されたが、敵意といらいら尺度は同じ尺度の下位尺度であり、実質的には2つの尺度との相関を確認したに留まっている。そ

ここで、自己呈示の統制・管理を担う個人差要因であるところのセルフモニタリングや社会的望ましさを、妬みと相反する概念と考えられる共感性、劣等感との関連が深いとされる自尊感情などより多くの変数との関係を確認することが望まれる。また、本尺度は、妬みという感情のみに限定せず、妬みが喚起される要因となっている認知的側面やその後の行動の意図に関する側面も含まれた項目から構成されている。しかし、他者嫉視尺度得点が総じて低かったことなどからも明らかなように、ネガティブな内容の項目が多かったため、社会的望ましさとといったモラル判断に近いものが混入してしまった可能性がある。さらに行動の意図などは、妬みという感情反応というよりは、むしろ対処に近い側面であると考えられ、妬みの感じやすさのみに限定して議論するためには、そうしたものを別個にして扱う方が適切であろう。したがって、本尺度の使用に際しては、社会的望ましさも同時に測定してその影響を取り除く、行動的側面と感情的側面を厳密に区別し項目を再構成する、といった対策を講じるべきである。その上で、抑うつや不安といった不適応に関わるさまざまな変数と妬みとの関連を明らかにすることで、不適応形成の担い手としての妬みの役割を浮き彫りにし、子どもの問題の理解と克服の手立ての一助となることが期待される。

要 約

本研究の目的は、児童・生徒に適した、個人差としての妬みを測定する自己報告型の尺度を作成し、その妥当性と信頼性を検討することであった。28項目が妬み尺度として用意され、805名の児童・生徒を対象として、敵意、いらだち、劣等感情尺度とともに実施された。妬み尺度は、因子分析の結果をもとに18項目、2下位尺度（他者嫉視・自己蔑視）で構成された。また、相関係数による検討を行い、2つの下位尺度ともに高い妥当性と信頼性を有することが確認された。

引用文献

- Belk, R.W. 1985 Materialism: Trait aspects of living in the material world. *Journal of Consumer Research*, **12**, 265-280.
- Bers, S.A. & Rodin, J. 1984 Social-comparison jealousy: A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 4, 324-341.

- 土居健郎 1998 「甘え」と「妬み」 児童心理, **52**, 7, 1-11.
- 土居健郎・渡部昇一 1995 いじめと妬み：戦後民主主義の落とし子 PHP 研究所
- 堂野佐俊・山中幸子 1988 児童の劣等感と学習意欲の相関研究（その1）：現代の児童における劣等感分析 広高文教教育, **3**, 27-40.
- Gold, B.T. 1996 Enviousness and its relationship to maladjustment and psychopathology. *Personality and Individual Differences*, **21**, 3, 311-321.
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 4, 227-234.
- Horney, K. 1937 *The neurotic personality of our time*. New York: W.W. Norton & Company.
- Hupka, R.B., Buunk, B.G., Falus, A.E., Ortega, E. R., Swain, R. & Tarabrina, N.V. 1985 Romantic jealousy and romantic envy: A seven-nation study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **16**, 423-446.
- 村田豊久 1993 児童期のうつ病 臨床精神医学, **22**, 557-563.
- Neu, J. 1980 Jealous thought. In A. O. Rorty (Eds.), *Explaining emotion*. Berkeley: University of California Press. Pp.425-463.
- 中里浩明・田中国夫 1973 対人態度の感情構造に関する研究 心理学研究, **44**, 2, 92-96.
- Parrott, W. G. & Smith, R. H. 1993 Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 6, 906-920.
- 桜井茂男 1984 児童用社会的望ましき測定尺度 (SDSC) の作成 教育心理学研究, **32**, 4, 64-68.
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- Salovey, P. 1991 Social comparison processes in envy and jealousy. In Suls & T.A. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Pp.261-285.
- Salovey, P. & Rodin, J. 1984 Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 780, 792.
- Salovey, P. & Rodin, J. 1985 The heart of jealousy: a report on Psychology Today's jealousy and envy survey. *Psychology Today*, **19**, 9, 22-29.
- Salovey, P. & Rodin, J. 1986 The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy.

- Journal of Personality and Social Psychology, **50**, 1100-1112.
- Silver, M. & Sabini, J. 1978 The perception of envy. *Social Psychology*, **41**, 105-117.
- Smith, R.H., Parrott, W.G., Ozer, D. & Moniz, A. 1994 Subjective injustice and inferiority as predictors of hostile and depressive feeling in envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 6, 705-711.
- Steinberg, L. & Silverberg, S.B. 1986 The vicissitude of autonomy in early adolescence. *Child Development*, **57**, 841-851.
- 首藤敏元 1994 幼児・児童の愛他行動を規定する共感と感情予期の役割 風間書房
- 高橋由典 1987 羨望論 思想, **757**, 23-46.
- 坪田雄二 1991 二者関係における嫉妬と羨望の比較: 両感情の生起因と感情構造の観点から 広島大学大学院教育学研究科博士課程論集, **16**, 76-80.
- 坪田雄二 1993 原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響 実験社会心理学研究, **33**, 1, 60-69.

— 2001. 9. 28 受稿 —